Miyazaki Women's Junior College

られている。

○禁止の意を表すと解されるもの　四例

用例三八四・四八一・四八八・八三九

○作者は、源俊頼朝臣（二首）、天台座主源心、右衛門督頼実、藤原定家、皇太后宮大夫俊成、法印静賢、俊恵法師。よみ人知らずはない。

○部立ては、冬歌（三八四）、離別歌（四八一・四八八・四九六・四九七）、恋歌三（八三九）、雑歌上（九九六・一〇二二）であり、離別歌が五割を占める。（　）は歌番号。

○作者が禁止している対象は、野辺のけしき（三八四）、都に残る人（四八一）、法会に来ていた人（四八八）、旅立ちを見送る人（四九六）、旅立つ人（四九七）、二世かけて契った人（八三九）、山の端の月（九九六）、秋の月（一〇二二）であり、人事にかかわるものが多い。自然・人事にわたる。（　）は歌番号である。

おわりに

『後撰和歌集』の「な…そ」一五例（詞書二例）、「…な」一六例（詞書二例）、『千載和歌集』の「な…そ」四例、「…な」八例を検討した。『金葉和歌集』『後拾遺和歌集』の時と同じく「な…そ」「…な」のいずれにも「禁止の意味をあらわすもの」「懇願の気持ちを含めて禁止するもの」が見られる。また作者の禁止している対象も自然・人事の多岐にわたる。『拾遺集』『詞花集』の禁止表現の用例を検討して八代集の禁止表現を早い機会にまとめたい。

なお、日記、物語等の「な…そ」「…な」は、登場する人物の対人関係（身分の上下・男女・親子等）、呼びかけている対象によって、婉曲な禁止表現など、禁止表現のニュアンスは違うということを確認してきた。今回『後撰和歌集』『千載和歌集』の「な…そ」「…な」の禁止表現を検討して、歌、詞書の中に述べてある、時代、場所、登場人物の対人関係、痛切に呼びかけている対象等を確かめて読み進めると深い読みができると思った。

主要な参考文献

後撰和歌集全釈　木船重昭　笠間書院
後撰和歌集　片桐洋一　岩波書店
千載集総索引　滝沢貞夫編　笠間書院
千載和歌集　片野達郎　松野陽一　岩波書店
古今和歌集　新日本古典文学大系　岩波書店
万葉集　一　日本古典文学全集　小学館
万葉集　三　日本古典文学全集　小学館
源氏物語評釈　玉上琢彌　角川書店
伊勢物語　福井貞助　校注・訳　小学館
新編国歌大観　角川書店
後拾遺和歌集　新日本古典文学大系　岩波書店
金葉和歌集　新日本古典文学大系　岩波書店
古語大辞典　中田祝夫編監修　小学館

〔平成七年一二月十日受理〕

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

「有明の空」は、前歌「帰りつる名残の空をながむればなぐさめがたき有明の月」を承ける。前歌は、男を帰した後の尽きない名残の空の有明の月が女の心で詠まれ、八三九は、結ばれた後の不安を男の心で詠んでいる。いずれも後朝の心を詠んだ歌である。巻第十三恋歌三の最後。

菅原の伏見の里でともに臥し、有明の空のもと現世から後世にかけて変わるまいと契ったことを忘れるなよ、の意。

用例七　九九六「都を離れてとをくまかること侍ける時、月を見てよみ侍ける　あかなくにまたもこの世にめぐり来ば面変わりすな山の端の月　法印静賢」（巻第十六　雑歌上）

都を離れて遠国へ下向することがありました時、月を見た時の歌である。

いくら見ても飽くことがないのに、また私が輪廻転生してこの世に再び生まれて来るならば顔つきを変えず今の姿を見せてほしい、の意。「めぐり」は「月」の縁語。離別の歌はよく惜別の情が詠みこまれ、懇願の気持ちを含む「な」が多い。

用例八　一〇二二「摂政右大臣家に百首歌よませ侍ける時、月の歌の中によめる　この世にて六十はなれぬ秋の月死出の山路も面変はりすな　俊恵法師」（巻第十六　雑歌上）

摂政右大臣家で百首歌を詠ませた時、月への思いを詠んだ歌。

この世で六十年もの間離れずに来た秋の月よ、死出の山路でも顔つきを変えずにいてほしい、意。この世からあの世への友としての月に親愛の気持ちをこめてうたいあげている。

まとめ

1「な」（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの　二例

用例三・四

○禁止の意を表すと解されるもの　二例

用例一・二

○作者は、源義家朝臣、前中納言雅頼、法性寺入道前太政大臣家参河、近衛院である。

○部立について見ると、春歌下、夏歌、恋歌二、雑歌上である。四例、すべて歌の中にあり、詞書の「な…そ」はない。

○作者が禁止している対象は、吹く風（一〇三）、宮こ人（一六八）、言い寄る男（七二九）、有明の月（一〇〇〇）であり、自然・人事それぞれ二首ずつである。（　）は歌番号。

○「な…そ」を含む文節を見ると、「なこその関」（一〇三）、「引きなつくしそ」（一六八）、「思ひな寄りそ」（七二九）「隠れなはてそ」（一〇〇〇）であり、複合動詞の間に副詞「な」が入るもの四例、「な」と「そ」の間にカ変の未然形が入り懸詞になっているもの一例である。（　）は歌番号である。

2「終止形・な（終助詞）」漢数字は歌番号。用例三八四・四八一・四八八・四九六・四九七・八三九・九九六・一〇二二　八例

詞書にはない。

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの　四例

用例四九六・四九七・九九六・一〇二二

「四九六・四九七」は、作者に何らかの関係のある動作の予定がある場合に、制止の意を含みつつ懇ろに願い望む状況下で用いられている。

「九九六・一〇二二」の「な」は、作者に深い思いがあるために他に対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む状況下で用い

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

歌　八例

用例一　三八四「あけぬとも猶あき風はをとづれて野辺のけしきよおもがはりすな　源俊頼朝臣」（巻第六　冬歌）

雲井寺歌合で前歌「からにしきぬさにたちもてゆく秋もけふやたむけの山路こゆらん」と組み合されて引き分けた歌である。「あき風」「野辺」を男女に見立てて擬人化している。「顔つきが変わる」意の「おもがわりすな」は、九九六・一〇二二にも用いられている。九月最後の夜が明けてもやはり秋風が訪れて来て、迎える野辺の景色の方も、お前も面変わりなどするなよ、の意。「な」は禁止の意を表す。

用例二　四八一「忘るなよ帰る山路に跡たえて日数は雪の降りつもるとも　源俊頼朝臣」（巻第七　離別歌）

堀河院の御代に百首歌を献上した時、離別の思いを詠んだ歌。四七九「帰りこむほども定めぬ別れ路はみやこの手振り思ひ出でにせよ」・四八〇「行く末を待つべき身こそをいにけれ別れは道のとをきのみかは」　四八一の三首は離別の歌である。

帰れる山なのに山道が途絶えて帰れなくなり、雪が降り積もるように日数がつもっても、私のことは忘れるなよ、の意。初句切れ、倒置法で「忘るなよ」と詠み、離別の思いを強調している。「つもる」は「日数がつもる」「雪がつもる」の懸詞。

用例三　四八八「人の法会行ひける導師に越前国にまかりて、上りなむとする時、かの国の願主別れ惜しみけるによめる　ながらへてあるべき身とし思はねば忘るなとだにこそ契らね　天台座主源心」（巻第七　離別歌）

仏事の願いを起こした人の法会を行った導師が越前の国に下向して、都へ帰る時、越前の国の願主が離別を惜しんで詠んだ歌。生きながらえて、いつまでもこの世に生きていることのできる身とも思はないので「忘れないで」ということでさえ約束できません、の意。この世は無常の世であるので離別の思いは一入である。「な」は禁止の意。

用例四　四九六「人に餞し侍けるあか月よみ侍ける　忘るなよ姨捨山の月見てもみやこをいづる有明の空　右衛門督頼実」（巻第七　離別歌）

旅立つ人にうまのはなむけをしました「あか月」に詠んだ歌である。

姨捨山の名高い月を見ても、今こうして都を旅立つ時の有り明けの景色を忘れないでくださいよ、の意。

早暁の「あか月」を見て、旅立つ人が下向して行く信濃国の姨捨山の美しい月を思い、離別の歌を詠んだ。「な」は懇願的な禁止である。

用例五　四九七「百首歌よみ侍ける時、別れの心をよみ侍りける　別れても心へだつな旅衣いくゑかさなる山路なりとも　藤原定家」（巻第七　離別歌）

百首歌を詠んだ時、離別の思いを詠んだ歌である。

別れても心にへだては作らないでください。旅衣を身につけ幾重にも重なる山路を遠くへだてる身とはなっても、意の歌。

「へだつ」は「衣」の縁語、「いくゑ」「かさなる」も「衣」の縁語。前歌に続き、都を去り、遠い国へ旅立つ人を送る惜別の心情が伝わってくる。「心にへだては作らないでほしい」と懇ろに制止している。巻第七、離別歌の最後であり、第八は羇旅である。

用例六　八三九「忘るなよ世〻のちぎりを菅原や伏見の里の有明の空　皇太后宮大夫俊成」（巻第十三　恋歌三）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

りける女（一三一三）、平のたかとをが妻（一三三四）と八例すべて人事である。

○「あらがふなゆめ」（七八一）は「ゆめ」を伴い、詠み手の強い心情を表現している。

『千載和歌集』の禁止表現

一

「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

歌　四例

用例一　一〇三「陸奥国にまかりける時、勿来の関にて花の散りければよめる　吹く風をなこその関と思へども道もせにちる山ざくらかな　源義家朝臣」（巻第二　春歌下）

陸奥国に下向したとき、勿来の関で桜の花の散ったのを詠んだ歌である。

「来る勿れ」という名のこの勿来の関には、桜の花を散らす風も吹くなかれと思うけれども、道も狭くなるほどあたりに散っている山桜であることだ、の意。惜春の心情を詠んでいる。

用例二　一六八「久我内大臣の家にて旅宿菖蒲といへる心をよめる　宮こ人引きなつくしそあやめ草かりねのとこの枕ばかりは　前中納言雅頼」（巻第三　夏歌）

久我内大臣の家で旅宿の菖蒲という心を詠んだ歌である。

都を離れて旅をする都人よ、あやめ草を引き尽くすなよ。旅の仮枕を結ぶ程度は残してほしい。「かりね（仮寝）」に「あやめ」の縁語「かりね（刈り根）」にかける。五月五日の端午の節句に使うことに思いをはせての歌と思われる。

用例三　七二九「大納言重通少将に侍ける時名立つ事侍けるを、同じくはまことになさばやといひつかはして侍ければ、よみてつかはしける　逢ひ見むと思ひな寄りそ白浪の立ちけん名だにをしきみぎはを　法性寺入道前太政大臣家参河」（巻第十二　恋歌二）

大納言重通が少将であった時、評判になったので、同じことなら噂だけでなく本当に逢いたいものだと思って言ってやったところ、詠んで贈ってきた歌。

私に逢おうなどと思いをかけて近寄らないでください。立った浮き名でさえも残念に思う身であるのにの意。「寄りそ」の「そ」に「磯」を響かせ、「みぎは（汀）」に「み（身）」をかける。「寄り」「立ち」「みぎは」は「白浪」の縁語（新日本古典文学大系『千載和歌集』）。

用例四　一〇〇〇「従一位藤原宗子病重くなりて、久しくまいり侍らで心細きよしなど奏せさせて侍けるにつかはしける　浮雲のかゝるほどだにあるものを隠れなはてそ有明の月　近衛院御製」（巻第十六　雑歌上）

従一位藤原宗子が重病になって、長いこと参上しませんので心細いことなど奏上させました時に贈った歌。

浮雲がかかる間でさえ月は見えているのに、隠れてしまわないでほしい、有り明けの月よの意。「浮雲」は「月」の縁語。宗子が生きていることで安心できるという気持ちが「ものを」に凝縮して表現されている。「な…そ」は懇願の気持ちを含めて禁止する用例である。

二

「終止形・な（終助詞）」

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

み人知らずが、一五首中、七首ある。

○部立ては、春中（三首）、春下（一首）、秋中（一首）、冬（一首）、恋二（一首）、恋四（一首）、恋八（二首）、雑一（一首）、雑二（一首）、離別　羇旅（二首）で「春」「恋」を合わせると八首になる。

○作者が懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、延光朝臣（六一）、壬生忠岑（八〇）、伊勢（八三〇）、女（一〇四一）、鷹を飼育する役人（一〇七六）、男（一一八五）、旅にまかりける人（一三二八・一三三〇）等の人物が八首、動物は呼子鳥（七九）が一首、春の山風（一三一）、天の河霧（三三六）、霜枯れの枝（四七六　擬人化して呼びかけ）、なこその関（六八二　「来るな」の意をかける）等の自然に関するものが四首である。詞書は、女から作者に（一〇三一）、躬恒（一〇八四）の二首である。作者の呼びかけている対象は概して人と自然に関するものである。（　）は歌番号。

○「いたくなわびそ」（八〇）、「いたくな思ひわびそ」（一〇三一）と、「な…そ」の上に形容詞「いたし」の連用形「いたく」を置いて詠み手の強い心情を表現している。『金葉和歌集』に一例、『後撰和歌集』二例ある。（　）は歌番号。

○「な…そ」を含む文節を見ると、「な…そ」の間に複合動詞がはいるもの一例、カ変の未然形がはいるもの一例、一三例は連用形である。「な…そ」の間に「わぶ」の入るものが四例あり、作者の心情表現に好都合だったと思われる。用例を抜き出すと、「な告げそ」、「な鳴きそ」、「なわびそ」（三例）「な乱りそ」、「な隠しそ」、「なこそ」、「な思ひわびそ」（詞書）、「な怨みそ」、「なとがめそ」、「な言ひそ」（二例　一例は詞書）、「な果てそ」である。

2「終止形・な（終助詞）」　一六例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの　一〇例

用例四・五・八・九・一〇・一一・一二・一三（詞書）・一五・一六

「四・五・一六」は、作者に関係のある動作が予定されているために、かかわりのある者に制止の意を含みつつ懇ろに願い望む「…な」である。

「八・九・一〇・一一・一二・一三（詞書）・一五」は、作者に、深く切々たる思い、苦悩、離別の悲しみ、嘆きに耐える心情等があるために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ、懇ろに願い望む「…な」である。

○禁止の意を表すと解されるもの　六例

用例一・二・三・六・七・一二（歌）

○作者は、つらゆき、よみ人知らず（五首）、平定文、藤原滋幹、元方、枇杷左大臣、藤原きよたゞ、平たかとをの妻、貫之、むすめである。よみ人知らずが五首ある。一三三四の詞書の「…な」は平たかとをのことばである。

○部立ては、春下（八二・一二〇）、夏（一六二・一八三）、冬（五〇二）、恋二（六九五）、恋三（七八一）、恋四（八〇一）、恋六（一〇三三）、雑二（一一八三）、離別　羇旅（一三一〇・一三一三・一三三四・一三三九）である。一三三四には歌と詞書に「…な」がある。「恋」「離別」の歌に多い。

○作者が懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、女子持て侍りける人（一八三）、女（五〇二・一一八三・一三四九）、あひ知りて侍ける人（八〇一）、君（一三一〇）、同じ家に久しう侍

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

ようにはかない身は何とか消えないでいるばかりです。生きていると安心しないでください、の意。

用例一三　一三一三「同じ家に久しう侍ける女の、美濃の国に親の侍ける、とぶらひにまかりけるに　今はとて立帰ゆくふるさとの不破の関路に都忘るな　藤原きよたゞ」（巻第十九　離別　羇旅）

同じ家に長い間いた女が、美濃の国に親がいるので、訪れ下った時の歌。「今はもうお別れです」と言って、あなたは親の住む美濃へ帰って行きますが、ふるさとの不破の関路にいても、この都のことは忘れないでほしいものだよ、の意。別れを惜しむ歌である。

用例一四・一五　一三三四「平のたかとをが、いやしき名をとりて、人の国へまかりけるに、『忘るな』と言へりければ、たかとをが妻の言へる　忘るなと言ふにながるゝ涙河うき名をすゝぐ瀬ともならなん」（巻第十九　離別　羇旅）

平のたかとをが、かんばしくない噂を立てられて、地方へ下った時に、「私を忘れないでください」と言ったので、たかとをの妻が詠んだ歌。「忘れるな」という言葉によって泣かれて流れるこの涙の河はあなたの悪名をすすぐ瀬ともなってほしいです、の意。「ながるゝ」は「泣かるる」と「流るる」の懸詞。「瀬」は「河」の縁語。

用例一六　一三四九「遠き所にまかるとて、女のもとにつかはしける　忘れじとことに結びて別るればあひ見むまでは思ひ乱るな　貫之」（巻第十九　離別　羇旅）

遠い所に下って行こうとして、女のもとに贈りました歌。忘れまいと、格別に心をこめて結んで別れたのだから、わたしが帰って来て再び契る時までは、思い乱れて解き乱さないでください、の意。「乱る」は下二段活用の自動詞として、思い乱れる意と四段活用の他動詞として、解き乱す意との両意を重ね、「結び」の縁語（『後撰和歌集全釈』）。『伊勢物語』三十七段に「われならで下紐解くなあさがほの夕影またぬ花にはありとも」「ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまでは解かじとぞ思ふ」の贈答歌がある。『万葉集』巻第十二に「二九一九　二為而結之紐乎一為而吾者解不見直相及者」に類歌がある。

まとめ

1「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの　（歌番号は『新編国歌大観』による）　一四例

用例一・二・三・四・五・七・八・九（詞書）・一〇・一一・一二（詞書）・一三・一四・一五

「一・二・四・七・八・九・一一・一四・一五」は、作者に苦悩・嘆きの心情・思いやり・あわれに思う余情・深く切々たる思い等あるために、かかわりのあるものに対して制止のい含みつつ、懇ろに願い望む「な…そ」である。

「三・一〇・一六」は、作者の事象の展開が予想できてさらに、心情的に懇願する必要のある場合の「な…そ」である。

「五・一一・一三」は、作者に関係のある動作が予定されているために、かかわりのあるものに制止の意を含みつつ懇ろに願い望む用例である。

○禁止の意を表すと解されるもの　一例

用例六

○作者は、大将御息所、はるみちのつらき　紀貫之、藤原清正、小八条御息所、贈太政大臣、在平行平朝臣、みつねである。よ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

みつつ懇ろに願い望む用例である。「な…そ」には、よく見られる。一八三・五〇二と同種の「…な」である。

用例七　七八一「夜ゐに女にあひて、『かならず後に逢はん』と誓言を立てさせて、朝につかはしける　ちはやぶる神ひきかけて誓ひてし言もゆゝしくあらがふなゆめ　藤原滋幹」（巻第十一　恋三）

夜に女に逢って、「必ずこれから後も逢いましょう」と誓いの言葉を立てさせて、翌朝に贈った歌。神かけて誓った約束の言葉が恐ろしいので、「そんなことを誓ったおぼえはありません」と決して言わないでください、の意。副詞「ゆめ」を伴う「…な」は強い禁止である。『大和物語』八十四段の「忘らるる身をば思はずちかひてし人のいのちの惜しくもあるかな」を想起させる歌である。

用例八　八〇一「あひ知りて侍ける人の近江の方へまかりければ関越えて粟津の森のあはずとも清水に見えし影を忘るな　よみ人知らず」（巻第十二　恋四）

言い交わしていました男が、近江の方へ下ったので。逢坂の関を越えて、粟津の森へ行くので逢わなくなっても、この逢坂の関の清水に映って見えた私の姿を忘れないでくださいの意。「関越えて粟津の森の」は「あはず」の序詞。あなたを思って忘れない私の姿は逢坂の関の清水に映ったはずです。一首の意はどうか私を忘れないでくださいであるから「…な」は、懇願の気持ちを含めて禁止する用例である。

用例九　一〇三三「忍びて住み侍ける人のもとより、『かゝる気色、人に見すな』と言へりければ　竜田河立ちなば君が名を惜しみ岩瀬の森の言はじとぞ思　元方」（巻第十四　恋六）

一目を忍んで住んでいました女のもとから「男が住むようになった様子を、人に見せなさいますな」と言って来ましたので。世間に噂が立ってしまったら、あなたの名に傷がつくのが惜しいので言うまいと思っていますよ、の意。「竜田河」は「立ち」の、「岩瀬の森」は「言は」の序。

用例一〇　一一八三「返し　楢の葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるな　枇杷左大臣」（巻第十六　雑二）

枇杷の左大臣が、用があって、楢の葉を求めて、千兼が情を交わしていた女の家に、取りに行かせたところが、「夫のありますわたくしの住まいの庭を、あなたは、いつ、お通いになって、楢の葉をなれなれしい顔をして折りにおよこしになったのですか」の「返し」である。一首は、楢の葉の葉守の神がいらっしゃるのを知らないで折ってしまいました。祟らないでいただきたいです、の意。

用例一一　一二九八「題しらず　我も思ふ人も忘るなありそ海の浦吹く風の止む時もなく　ひとしき子のみこ」（巻第一八　雑四）

私もあなたを思っています。あなたもわたしのことを忘れないでください。荒磯海の浦を吹く風が止むときがないように始終思い続けてください、の意。『万葉集』巻第四の笠女郎の「吾毛念人毛莫忘多奈和丹浦吹風之止時無有」がある。互いに思いあう歌である。この「…な」は、作者が心情的に深い思いがあるために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む用例である。

用例一二　一三一〇「京に侍ける女子を、いかなる事か侍けん、心うしとて、留め置きて、因幡の国へまかりければ　打捨てて君しいなばの露の身は消えぬ許ぞ有とたのむなむすめ」（巻第十九　離別　羈旅）

京に住んでいた女の子をどんな事があったのか、父はつらいと思って、京に留めておいて、因幡の国へ下った時の歌である。私を捨てあなたが因幡の国へ行ってしまわれましたならば稲の葉に置く露の

NII-Electronic Library Service

く、いつまでもひとり美しくいてほしい、と思っていたのに、いいお人ができておしまいでしたねえ。はなはだもって残念なこと〉〈おあいにくさま。散るのはさくらの花の常。散るな、ひとりでいろ、おっしゃっても、無理ですわ〉という戯れ歌の応酬かも知れない」とある。

用例二　一二〇「題しらず　わがやどの影ともたのむ藤の花立ち寄り来とも浪に折らるな　よみ人も」（巻第三　春下）

私の一家が身を寄せる蔭とも思って頼りにしている藤の花よ、藤浪が寄せてきてもその浪に折られるな、の意。『伊勢集』によれば五條尚侍四十賀の屏風絵の歌であり、海岸の家に咲く藤の花を詠んだ歌（『後撰和歌集全釈』）。

用例三　一六二「ゆふだすきかけてもいふなあだ人の葵てふ名はみそぎにぞせし　よみ人知らず」（巻第四　夏）

「賀茂祭の物見侍ける女の車に言ひ入れて侍ける」歌の「返し」である。木綿襷を掛けても、口に出して言わないでほしいです。浮気者が「逢う日」という意を持つ葵などという語は、禊で流してしまいました、の意。賀茂の祭に基づく縁語である「ゆふだすき」「かけて」「みそぎ」「葵」を用い、懸想めかした贈答歌の返しである。

用例四　一八三「女子持て侍ける人に、思心持てつかはしける　ふた葉よりわがしめゆひなでしこの花のさかりを人に折らすな　よみ人しらず」（巻第四　夏）

女の子を持っていました人に、思う心がありまして贈った歌。幼い時から、わたし一人で大切に守って育てたあの子を、花盛りに他の男に手折らせないようにしてください、の意。この男は幼少の頃から、将来は我が妻にと心をときめかしていたのかもしれない。『源氏物語』の「若紫」を想起させる。

用例五　五〇二「冬の池に住む鴛鳥のつれなくも下に通はむ人に知らすな　よみ人知らず」（巻第二　冬）

冬の池に住む鴛鳥が表面にそぶりを見せず水底に潜って泳いでゆくように私もこっそりあなたのもとに通いましょう。他人には知らせないでください。この「…な」も単なる禁止ではなく、作者が女のもとに通うという動作の予定があるために、他に対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む用例である。この「…な」は、単なる禁止ではなく、作者に関係のある動作が予定されているために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む用例である。「な…そ」には、よく見られる。一八三と同種の「…な」である。「冬の池の浮き巣に棲んで、なにくわぬ顔をしている鴛が、実は、巧みに潜水して魚をすばやくとらえてたべるように、人目をくらましてうまうまと、女のもとに通おうと言う」歌（『後撰和歌集全釈』補説）。『古今和歌集』に「題しらず　冬の池に住む鴛鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな　みつね」（巻第十三　恋歌三）があり、第四句に異同がある。

用例六　六九五「人を思かけてつかはしける　浜千鳥たのむを知れとふみそむる跡うち消つな我を越す浪　平定文」（巻第十　恋二）

女に思いをかけて、贈った歌。頼りにしていることを知ってください。浜千鳥が初めて残した足跡を消さないでください。私を越すほどの大きな浪よ、の意。「女」とのこれからさきのことを思い、初めて贈った手紙の筆跡を消さないでほしい、私以外の大きな力よ、の意かと思う。

この「…な」も、単なる禁止ではなく、作者に関係のある動作が予定されているために、かかわりのあるものに対して制止の意を含

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

る」仲であるように「みつね」が言うことに困り果てた女が詠んだ歌と思われる。この「な…そ」は、なれなれしく言う「みつね」に困り、制止の意を含みつつ懇ろに願い望む例である。なお『後撰和歌集全釈』に「〈くち木〉は、『朽ち木』ではなく、「口木」である」「口木。人や馬の口にかませて声を出せないようにする箸のような道具」とある。

用例一三　一一八五「返し　ひとふしに怨な果てそ笛竹の声の内にも思ふ心あり　よみ人知らず」（巻第十六　雑二）

「一一八四　友達のもとにまかりて、盃あまた度になりにければ、逃げてまかりけるを、とゞめわづらひて、待て待りける笛を取り留めて、又の朝につかはしける　帰ては声やたがはむ笛竹のつらきひとよのかたみと思へば」の「返し」である。一首は、一つの事で怨まないでください。笛の音の中にもあなたを思う心があると申しますから、の意。一一八五は、友人を引き止めるために取り上げた笛を、翌朝、返す時に添えた歌で、男どうしの親密な交友を詠んでいる。作者にはっきりした動作の予定があり、かかわりのあるものに制止の意を含みつつ懇ろに願い望む「な…そ」である。

用例一四　一三二八「旅にまかりける人に装束つかはすとて、添へてつかはしける　袖濡れて別はすとも唐衣ゆくとな言ひそ来たりとを見む　よみ人知らず」（巻第十九　離別　羇旅）

旅に下った人に、装束を贈ろうとして、添えて贈った歌である。一首は、袖が濡れるほどに涙を流して別れても「ゆく」などといわないでください。「唐衣」の縁で、「着た」「来た」と思って、またお会いしましょう。「唐衣」を巧みに詠み込み、別離の心情がよくあらわれている。この「な…そ」も、作者が心情的に深い思いがあるため、「旅にまかりける人」に制止の意を含みつつ懇ろに願い望む用例である。

用例十五　一三三〇「旅にまかりける人に扇つかはすとて　添へてやる扇の風し心あらば我が思ふ人の手をな離れそ　よみ人知らず」（巻第十九　離別　羇旅）

旅に下った人に、扇を贈ろうとして　私の心を添えておくる扇が、人間のような心を持っているならば私が思っている方の手から離れないでほしい、の意。「添へてやる」「心あらば」は「扇」を人に見立てた表現であり、この語句に贈る作者の気持ちがよく表れている。「我が思ふ人」は「旅に下る」と思いは「扇」に託すしか術はない。作者の切々たる心情を「手をな離れそ」に凝縮して述べたと思われる。

二

「終止形・な（終助詞）」　一四例

歌　二例

詞書

用例一　八二「桜の花の瓶にさせりけるが散りけるを見て、中務につかはしける　ひさしかれあだに散るなと桜花瓶に挿せれどうつろひにけり　つらゆき」（巻第三　春下）

瓶にさしてあった桜の花が、散ったのを見て、中務に贈った歌。久しくあれ、はかなく散るなと思って亀にかよう瓶にさしていたがその甲斐もなく散ってしまったよ、の意。「瓶」は、万年の命を保つという「亀」に懸ける。「返し」は、「千代ふべき瓶に挿せれど桜花とまらむ事は常にやはあらぬ」（巻第三　春下）。『後撰和歌集全釈』の補説に「詠歌の事情の詳細は不明だが、中務は男性関係のかなりはなやかな人であったから、〈いたずらに男の人と契ることな

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

けたのでしょうか、の意。『後撰和歌集』の補説に「思うように逢えなくて悩む」の記述がある。「なこそ」は「勿来の関」の「勿来」と「来るな」の意を掛けている。この「な…そ」は禁止の意をあらわしているが、『後撰和歌集』の補説のように「思うように逢えなくて悩む」歌と解すると、懇願的な禁止の意が若干考えられる。

用例八　八三〇「『伊勢なむ人に忘れられて嘆き侍』と聞きてつかはしける　ひたぶるに思なわびそ古さるゝ人の心はそれぞ世の常　贈太政大臣」（巻第十二　恋四）

「伊勢が男に忘られて、かわいそうに嘆いています」とうわさに聞いておくった歌。そんなに一途に思い悲しみなさるな。過去の恋人にされてしまう人の心は、まさに男女の間では常なのですから、の意。「嘆き侍」の「侍（はべる）」は連体形で止め、あわれに思う余情をこめる（『後撰和歌集全釈』）。「な…そ」を用い、婉曲な気持ちで禁止している。体言止め「世の常」で世間一般の男女の心を詠嘆している。

用例九　一〇三一「女のもとより『いといたくな思わびそ』とたのめおこせて侍ければ　慰むる言の葉にだにかゝらずは今も消ぬべき露の命を　よみ人知らず」（巻第十四　恋八）

女のもとから「そんなにひどくお嘆きなさいますな」と期待させるようなことを言って来ましたので　慰めてくださるお言葉だけにでも、信頼しなければ、今にも消えてしまいそうな、露のようにはかない命ですよ、の意。詞書の中の「な…そ」である。この「な…そ」は作者が苦悩のために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む用例である。

用例一〇　一〇四一「返し　越えぬてふ名をな怨みそ鈴鹿山いとゞ間近くならんと思を　よみ人知らず」（巻第十四　恋八）

「音もせずなりもゆく哉鈴鹿山越ゆてふ名のみ高く立ちつゝ」の返歌である。鈴鹿山を越えてしまった、私との一線を越えなさったというわさを怨まないでください。二人の関係がいよいよ親しくなるでしょうから、の歌意。この「な…そ」は、作者にある動作が予定されているために、かかわりのあるものに制止の意を含みつつ願い望む用例である。「越ゆ」「鈴鹿山」「間近くなら」は縁語で贈歌ともに修辞を駆使して男女の仲を歌いあげている。

用例一一　一〇七六「おなじ日、鷹飼ひにて、狩衣のたもとに鶴の形を縫ひて、書きつけたりける　翁さび人なとがめそ狩衣今日許とぞたづも鳴くなる　在原行平朝臣　行幸の又の日致仕の表たてまつりける」

「光孝天皇が嵯峨天皇の御世の例にならって、芹川に行幸なさった」同じ日の歌。鷹飼いで狩衣の袂に鶴の図柄を縫って、書きつけてあった歌。老人らしくふるまうことを皆さんとがめないでください。「狩衣を着てお供をさせていただくのは今日だけ」と袂の鶴も鳴いているのですから、という歌意。行幸の翌日、致仕の表を奉った。この「な…そ」は、作者に関係のある動作がはっきりと予定されているために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む用例である。

用例一二　一〇八四「『我を知り顔に、な言ひそ』と女の言ひて侍ける返事に　葦引の山に生ひたるしらかしの知らじな人を朽木なりとも　みつね」（巻第十五　雑一）

「私を知っているように言わないでほしい」と女が言いました返事に　山に生えている白檀木の語呂合わせではないが、あなたの方も私を知らないのですね、私が世に知られず朽ち果てる身であることも、の意。「知る」に「男女が交際する」意がある。すでに「知

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

用例二　七九「よぶこどりを聞きて、隣の家に贈り侍ける　わがやどの花にな鳴きそ喚子鳥よぶかひ有て君も来なくに　はるみちのつらき」（巻第三　春中）

私の庭のさくらの花で鳴かないでくれ、喚子鳥よ。お前が呼ぶかいがあるようにお隣りのご主人もいらっしゃって観桜してくださるのではないから、という歌。美しく咲いた桜を見に来てくれない嘆きの心情を「な鳴きそ」と詠んだと思われる。「な…そ」は懇願の気持ちを含めて制止する用例である。

用例三　八〇「壬生忠岑が左近の番長にて、文おこせて侍けるついでに、身をうらみて侍ける返事に　ふりぬとていたくなわびそ春雨のたゞに止むべき物ならなくに　紀貫之」（巻第三　春中）

壬生の忠岑が左近衛府の番長で、手紙を私によこしました機会に、自分の不遇を嘆きました返事に　今の官職のままで年をとってしまったと言って、ひどくお嘆きなさいますな。春雨が降りましたからは、何もなくて止むはずはなく、そのまま止まってしまうものではないのですから、という歌。この「な…そ」は、作者に事象の展開が予想できて、さらに心情的に懇願する必要のある場合の用例である。形容詞「いたく」を用いて作者の心情をつよく詠いあげている。

用例四　一三一「題しらず　鶯の糸に撚るてふ玉柳吹きな乱りそ春の山風　よみ人も」（巻第三　春下）

柳の枝を糸にたとえ、それは鶯が撚ったものと見立てた歌。「鶯が糸に縒るという美しい柳の枝を吹いて乱すなよ、春の山風よ」の意。『古今集』に「鶯の笠にぬふといふ梅の花折りてかざさむ老いかくるやと」（巻第一　春歌上）・「青柳を片糸に縒りて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」（巻第二十　神遊びの歌）があり、梅の花笠を縫うといわれる鶯への思いが詠まれている。体言止めで詠嘆の心情を述べている。この「な…そ」は思いやりの感じられる用例である。

用例五　三三六「八月十五夜　秋風にいとゞふけゆく月影を立ちな隠しそ天の河霧　藤原清正」（巻第六　秋中）

秋風によって、いっそう夜がふけてゆき、美しい十五夜の月の光を、立って隠さないでほしい、天の河の河霧よ、の意。秋風・天の河・河霧・月を駆使して仲秋の名月を美しく歌い上げている。この「な…そ」は、作者に関係のある動作が予定されているために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む用例である。「天の河霧」の体言止めは余韻・余情の効果がある。

用例六　四七六「霜枯れの枝となわびそ白雪の消えぬ限は花とこそ見れ　よみ人知らず（巻第八　冬）

「霜枯れ」は、霜にあたって枯れること。冬の木を擬人化して生命を与え、呼びかけて慰める趣向の歌である　一首は、「霜に枯れた枝だ」などと嘆きなさるな、白雪が消えない限りは、かれが花だと思って見ましょうよ、の意。『後撰和歌集全釈』に「託意の趣が濃い。（中略）あなたの白髪のあるかぎり、終生、あなたを花と見、愛するよ」の意とある。この「な…そ」は禁止の意を表す用例である。

用例七　六八二「寛平のみかど御ぐしおろさせたまうての頃、御帳のめぐりにのみ人はさぶらはせたまうて、近う寄せられざりければ書きて御帳に結びつけける　立ち寄らば影踏む許近けれど誰かなこその関をすへけん（五）小八条御息所」（巻第十　恋二）

宇田天皇がご剃髪なさったころ、御帳のまわりにだけ、人をば伺候させられて身近にもお寄せにならなかったので、書いて御帳に結びつけた歌。立ち寄ると、御影を踏むほどに近くに控えていますのに、いったいだれが勿来の関―来てはいけないという関―を間に設

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

宮崎女子短期大学紀要　第22号　1-12頁

『後撰和歌集』『千載和歌集』の禁止表現

―「な…そ」「…な」―

田中司郎

はじめに

本学の紀要二十一号に『金葉和歌集』『後拾遺和歌集』の「な…そ」「…な」の禁止表現四七例を検討した。この禁止表現の中に『古今和歌集』『新古今和歌集』の用例と同じく、「禁止の意味をあらわすもの」「懇願の気持ちを含めて禁止するもの」が見られ、また、作者の禁止している対象、懇願の気持ちを含めて禁止している対象は自然・人事の多岐にわたることを述べた。

さらに、作者が心情的に苦境にある場合、作者になんらかの関係のある動作が予定されている場合、作者に密接な関係がある上に事象の展開がはっきり予想できる場合に、懇願の気持ちを含めて禁止している用例が多く見られることも述べた。本紀要では、『後撰和歌集』『千載和歌集』の禁止表現も同様なことが見られるか否かを検討する。

『後撰和歌集』の禁止表現

一

「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

歌　一三例

詞書　二例

用例一　六一「朱雀院の桜のおもしろきことと延光朝臣の語り侍ければ、見るよしもあらまし物をなど、むかしを思ひでて　咲き咲かず我にな告げそ桜花人づてにやは聞かむと思し　大将御息所」（巻第二　春中）

「朱雀上皇の御所の桜のすばらしいこと」と延光朝臣が語りましたので、見る方法もあろうのになどと、昔を思い出して、「咲いたとか、咲かないとか私に告げないでください。朱雀院の桜の花のことを人伝に聞こうと思ったでしょうか、いや、思いもしませんでしたよ。」の意。「な告げそ」に作者の深い心情が込められているように思われる。この用例は、作者になんらかの苦悩があるために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ、懇ろに願い望む「な…そ」である。

NII-Electronic Library Service